

大宮踊りは、お盆（先祖の霊が現世に戻って来ると言われる仏教の祭日）に真庭で行われる祝祭の中心となる、伝統的な踊りである。

毎年夏に3日間、全国で祝うお盆は、文化的行事の日程の中で最大の祭日の一つとなっている。子どもたちは帰省し、家族と一緒に食事をして、家族の墓に供え物をする。お盆の祭りのクライマックスでは、しばしば、帰って来た先祖の霊を迎えるため、盆踊り（集団で踊る、威勢の良い踊り）が催される。太鼓を鳴り響かせ、コールアンドレスポンスのように声を掛け合う盆踊りは、通常、威勢の良い行事である。

しかし、真庭で見られる盆踊りは、他の地域と異なり、控えめで厳かだ。大宮踊りと呼ばれるこの踊りは、悠長でありつつ細やかな動作を取り入れている。一般的な盆踊りと似ているのは、軽やかな声掛けと、一つの手持ち太鼓を用いることくらいである。踊り手の手の位置や、前後に踏むステップは、用心深い狐の動きを真似したものとされている。日本では、狐は、雨と豊作（どちらも農村にとっては非常に重要な要素）のシンボルとみなされる。

この踊りが豊作につながるというのは、農業に限った話ではない。大宮踊りは伝統的に、蒜山の若者にとっての出会いとカップリングの機会ともなっており、ここでの出会いが結婚につながることも多かった。これは、次の世代に地域社会を支えてくれる子どもを増やすことにもつながった。子孫繁栄への願いは、踊りの独特なひとコマ（2名の演者のうち1人がゴマをすりつぶすためのすり鉢を、もう1人が木製のすりこぎを持ち、性器に見立てることで、男女和合を表現する）に、明確に示されている。この祝祭は、結婚を促す役目を果たす以外に、習律が緩む時間にもなっていた。祭りの期間中は、自由恋愛が許された。この期間に婚外で子どもを身ごもった場合には、母親に配偶者が居ても居なくても、母親が神から受けた賜物と考えられた。

大宮踊りは、町の周りの複数の開催地で、7月と8月の何日にもわたり実施される。踊りの動作は地区により少しずつ異なるため、鋭い地元民であれば、どの型の大宮踊りなのかを観察するだけで、その人の居住地を言い当てることができる。8月15日、福田神社で開催するメインイベントでは、クライマックスとして、花火大会も行われる。この神社は「大宮様」とも呼ばれる。大宮踊りの名前の由来である。この神社の中心部の前方には、屋根付きの踊り場がある。この種の建築的特徴の現存例としては、まれなものである。このフロアは、一年の大半の期間、雨風をしのぎながら、人々が祈りを捧げたり、数枚の硬貨を賽銭箱に投げ入れたりする場所となっている。しかし、お祭りの期間は、賽銭箱を取り払い、その他、余計なものをすべて片付けることで、踊り手のための場所となる。

大宮踊りのもう1つの重要な開催地は、吉森堂と呼ばれる木造の小さなお堂である。ここで、木でできた400年来の阿弥陀仏像が見守る中、踊りが催される。お堂の後方と右手（新しい倉庫の反対側）には、お墓が質素に並んで立てられている。最も古いものは、14世紀初期のものと考え

られる。この場所が長らく神聖な場所であり続けてきたことの証しである。

他に、大宮踊りのユニークな特徴として、シリゲが挙げられる。シリゲは、紙を切抜いて作った装飾品であり、踊り場の上に吊るされた長方形の大きな提灯の底にぶら下がっている。手漉きの和紙を丹精込めて切ることで、果物や野菜の単純なデザインから、浮世絵木版の巨匠の作品に匹敵するような、精巧な、着物を着た女性や風景まで、様々な事物が表現されている。こうした精巧な芸術品は、地元民が雪のために家にこもって暖かい天気を夢想する冬の時期と、陽気なお祭りの開催期間に作られることが多い。シリゲの多くの美しい作品や、大宮踊りの動画は、蒜山郷土博物館で年中観覧することができる。

大宮踊りの起源に関する正確な情報は時間とともに失われているが、大昔の宮廷の踊りと類似していることから、1,000年以上の歴史が示唆されている。四方八方を山に囲まれた真庭は、ごく最近まで地理的に孤立していたため、この盆踊りの型は、何世紀もの間、そのまま伝承されてきた。1997年、政府は、大宮踊りを重要無形民俗文化財に指定した。この踊りの特有の地域性と、現代の盆踊りの先駆けとして果たした役割が評価されたことになる。